美術の窓(61)

中期ビザンティン美術と平安朝の仏教美術(後)

大和文華館館長 吉川逸治

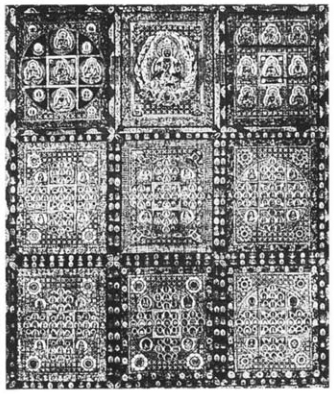
この理念の現存を主張する輝かしいモザイク像や、細微な聖画像の芸術は現実を超えた姿で、同時に不思議な力強い実感をもって心を惹きつける。私は、この中期ビザンティンの聖画像に接すると、ほぼ同時代の平安朝仏画、博物館の普賢や神護寺の釈迦、法華寺の阿弥陀といったイコンのやうな仏画を想ひだす。そして、ここでも理念の絶対世界の現示をまざまざと感じるし、一体、これまで理念といふものをこれらほど鮮やかに実現した芸術があったらうかと尋問したくなる。前四世紀、ギリシアのプラクシテレスやリュシポスの彫像が、霊魂のやうに生きてゐる不滅の理念を表現したことがあったらうか。中期ビザンティン美術のプラトニズムについては、ヴィーンのデムス教授なども指摘されてゐる。わが平安仏画もまた、優れた「イデア」の美術であらう。

平安仏画といへば、あの仏教的

金剛界(部分) 子島寺

理念の体系を示す現図曼荼羅(写真)にまで導かれてゆく。これら神秘的な理念の体系図を前に途方にくれてしまふ。なんといふ複雑な美しい人体像群の模様なのだらうかと。けれどもこれら曼荼羅には、ビザンティンの円蓋会堂の装飾図像体系と類似したところがある。曼荼羅は円蓋仏堂の図像装飾のプログラムを連想させないだらうか。金剛界曼荼羅は九個の区画に同系統の九種の小曼荼羅を描き集めたもので、仏堂の円天井にそのうちの一図、一体系を装飾させれば、金剛界曼荼羅全体の意味を象徴させるのに十分なのである。ことに、「成身会」のやうな完全な図では、正方形の区画の四隅に、古代ローマの世界地図なら四方の「風」を配置するところに風、火、水、地を置いて、中央の円輪図形をかこんでゐる。格天井の地文はこの図形が円蓋装飾から由来してゐることを示してゐるのではないか。

胎蔵界曼荼羅の方は、複雑な一大体系だから、簡単に分割するわけにはゆかない。しかし、これも周縁部の外金剛部の諸像は、周壁の装飾として分離することができる。その次は、四方に扉があるから、まんなかに円蓋を架した仏堂の十字形プランがすぐ読みとれる。大日如来を中心に、それをかこむ八尊が中心の円輪(円蓋)を形成し、その上方(仏堂の奥)、ビザンティン会堂なら内陣、奥陣にあたるところに仏母と釈迦を中心とする諸像が描かれ、その両側には、如来の叡智に関する諸像と慈悲に関する諸像を配置し、その下方(仏堂)は仏徒としての精進に関する諸像が列び、両端に不空羂索など特別

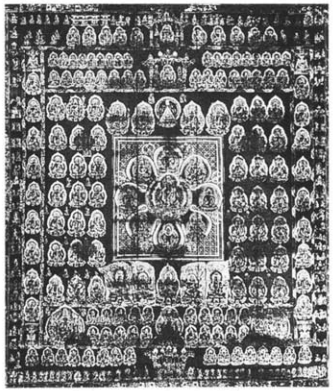


現図曼荼羅図 (金剛界)
平安時代 10世紀末〜11世紀初

な尊像が祀られて、教会堂の玄関廊(ナルテックス)のやうな部分を形成してゐる。いくつもの仏堂の図像装飾のプログラムが存在してゐたなかで、もっとも典型的な図像プログラムである胎蔵界、金剛界のプログラムを選択した識見はさすがである。金剛界曼荼羅が専門修業者の仏堂装飾なら、胎蔵界曼荼羅は社会全体を対象とした大仏堂の図像装飾であって、共に円蓋建築の装飾から出発したと想像することも許されるのではないか。

かうして、空海が高野山に建てた両界曼荼羅を象徴する二塔は、従前のスツーパを象徴する五重塔、三重塔とは性質を異にする円蓋仏堂を模したものだったのではないか。そして、曼荼羅的構想が形成された地方も、円蓋仏堂が行なはれた中央アジアのイラン仏教世界ではなかったか。

円蓋仏堂の形式は、折上天井の重層方形の仏堂といふ形式で、木造建築でもって模倣されるので、古くは法隆寺金堂がその珍らしい孤立的一例だが、典型的なものは鎌倉時代の禅宗様重層仏殿で示され、ここでは火頭窓や曲線装飾模様に中央アジアのアーチやドーム建築の模倣が処々に指摘されるし、ことに内部が四大柱を中心に二階の円天井まで吹抜きの高い空間を



同 (胎蔵界)
奈良・子島寺

なし、組物でかこまれながら、ドーム建築の内部空間をよく模写してゐる。

これに先立って、平安時代では、多宝塔の外に、奈良時代の金堂講堂の矩形の列柱形式とは全くちがふ三間三面の閉鎖的な三昧堂の建築がおそらく円蓋仏堂の集中形式の伝統を伝へてゐるものであらう。これが阿弥陀堂にも採用されて、曼荼羅堂の姿を与へ、宇治の平等院の鳳凰堂中堂では明らかに石造ドーム建築の丈高い内部空間の神秘がみごとに木造構造のうちに新しく生かされてゐる。

ある美的構想が執拗に材料や技術の相違を超えて、非常に遠隔な諸地域まで伝へられ、それぞれに独特な実現をさせるのは驚くべきことである。しかも、材料、技術といった外的形式のみならず、思想体系の相違をも超えて、多様さのうちにそれらを結合させる深層の美的意欲を物語ってゐる。仏教美術だからといって、インド、中国の美術ですむわけではなく、むしろ仏教美術を普遍性のある大美術にしてゐるのは古代ギリシアや古代西アジア、イランの諸美術の要素なのである。 (完)

〔初出『學鐙』1966年10月号、丸善刊。吉川逸治著『ロマネスク美術を索めて』昭和54年、美術出版社刊〕

季刊 美のたより No.117
平成8年11月14日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.